

【西田哲学会シンポジウム提題要旨】

西田における絶対無と個——田辺の絶対媒介を顧みながら——

美濃部 仁（明治大学）

発表では、西田が「個人的自己」と呼んでいるものがどのようなものであるかに注目し、それが「絶対無」と深い関係をもっていること、またそれがどのような関係であるかということ明らかにしたいと考えています。それによって西田における「個」の概念と「無」の概念のもつ特徴、そして、それに連なる西田の思想の特徴も明らかにすることができるかと思うからです。

考察にあたって主な手がかりにするのは西田の『無の自覚的限定』、とりわけその中の「私と汝」論文（1932年）です。西田は個人的自己を（1）自己限定する一般者と相即した自己限定する個物、（2）絶対無の自覚、（3）永遠の今の自己限定、（4）汝に対する私等と性格づけますが、それらの性格づけは互いに内的連関をもっています。発表ではその連関を取り出すことを試みます。個物と相即する一般者は絶対無の場所でなければならないこと、絶対無の場所における個物の自己限定は自覚でなければならないこと、自覚の形式は永遠の今の自己限定という時間性の形式であること、永遠の今の自己限定は汝に対する私によってのみ可能であるので、時間性と社会性は切り離すことができないこと等を、ヘーゲルの「具体的一般者」やキェルケゴールの「瞬間」といった概念を参考にしながらテキストに基づいて明らかにすることができるのではないかと考えています。それを通して、西田において「社会」は絶対無の場所に於てあるものとしての、つまり互いに絶対の他としての「私と汝」から成り立つものであること、それゆえ、我々の自己が社会的であることと「その一歩一歩が絶対の無に接して」いることとは一つであるということが言えるのではないかと思います。

西田の思想の特徴を取り出した上で、それを田辺の種の論理、とりわけ「絶対媒介」の思想と対比させることを試みます。田辺のテキストとしては「社会存在の論理」（1934/35年）と「種の論理と世界図式」（1935年）を参照する予定です。二人を対比させると、西田の立場からは、田辺は西田の思想の大事どころを見逃しているということが言えるように思われます。けれども、そこに田辺の思想の大事どころがあるのかもしれませんが。そのことは、後の議論で話題にできればと思います。

（2019年6月19日）